

研究の発展と大学・研究者の社会的責任



学長 山本 健 慈

本報告書は、国立大学法人第2期事業期初年度における本学の〈オンリー・ワン創成プロジェクト〉の成果報告である。

和歌山大学は、第2期中期目標において「高野・熊野世界文化遺産等豊かな歴史と環境に育まれた和歌山県唯一の国立総合大学として、『地域を支え、地域に支えられる大学』であるとともに、持続可能な社会の実現に寄与すること」、そして「紀伊半島を含む黒潮文化圏という歴史、自然、経済、文化を活かした研究活動によって創造された知見を活かし、地域から日本と世界の発展に寄与する。」ことを宣言している。

また、これらの研究と社会的寄与を、「教員の多様な問題関心に基づく諸活動を尊重」することによって実現することを大学運営の基本としている。

ただ、〈教員の多様な問題関心に基づく諸活動を尊重する〉ための研究支援と〈地域から日本と世界の発展に寄与する〉ための研究支援、この二つを実現しようとすることは、財政規模が小さい和歌山大学にとっては至難のことであるが、本報告書から、個々の研究者の個性的な研究課題を重ね合わせ、多彩な研究方法によって、地域の諸課題や科学・技術の現代的課題に挑戦している過程をみてとっていただけることと思う。

さて、研究活動は、そもそも研究者個人の学問的興味、関心から始まる。しかし研究の成果は、研究者個人を離れ社会性をもつ。もちろん研究過程そのものも社会性をもつ。このことを本年3月11日の東日本大震災にかかわって、研究者は痛切に反省をする必要があると思う。3・11後、原子力発電所などの設計、管理、研究に関与してきた研究者、技術者のなかには、「想定外」という言葉で、社会的責任を放棄するものが相次いだ。それでは、科学は信用に足るのか、技術は安心を提供するのかと、不信が広がってもやむを得ない。

今回の事態に直面するなかで、改めて考えることは、学問的良心と勇気ということについてである。政府の東日本大震災復興構想会議は、6月25日に「復興への提言～悲惨のなかの希望～」を発表したが、その冒頭には「破壊は前ぶれもなくやってきた」とある。しかしこれは正確ではない。なぜなら、少数者であることを恐れず学問的良心をかけて「前ぶれ」を警告してきた研究者がいたからである。彼らは、科学、技術を現実化する政府、企業、ある場合には学界からも排除されてきたわけである。私は、排除にも屈せず、勇気をもって学問的良心を貫いてきた彼らに敬意を払うことなくして、大学や研究者は、社会的信頼を回復することはないと思う。また、次世代の学術や技術開発を担う若者の教育を担うこともできないのではないかと思う。

和歌山大学においては、以上の観点から、研究者の社会貢献にともなう社会的責任についての議論を深め、研究者の倫理、使命について考え続けたいと思う。